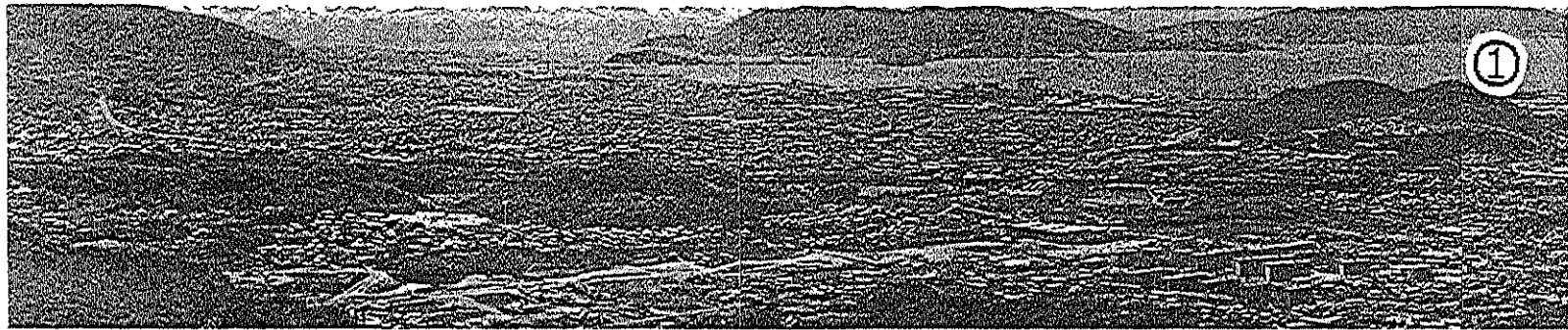


ふるさとの山!!「とおの山」史話特集。

桜木地区、平原の北側にある標高288mの「とおの山」のことについては、[その見晴らしの素晴らしさ] (写真) [老人クラブによる登山道などの整備] [この山に関係のある歴史話の一部] 等々は公民館報や、最近では郷土新聞「日刊新周南」等でかなり知られて来ましたが、今日は公民館便り特集号としてまとめました。

特集の全文及び漢字等の文字使いなど全て「清水 素」先生(趣味、代休通り)から原稿を地区老人クラブ事務局(懇談会)を経て頂戴したものです。



頂上からの見晴らし。(①東方面。②正面「南」方面。③西方面)

写真提供：平原町 山本幸太郎殿

注、「とおの山」の史実に見る「文字使い」については特集末尾参照のこと

城ヶ岡(注)は
鷲頭、内藤氏
攻略の前進基地

今から六百三十年余も前の事。正平五年(一三五〇年)から南朝方に味方していた大内弘世は富田の勝栄寺(土壘が残り県文化財指定)の陶弘政に命じ、正平七年当時北朝足利尊氏方に味方していた下松の鷲頭(わしご)・内藤両氏の末武城を攻撃した時、この遠尾山が前進基地だったので。この地方で、公家と武家南朝・北朝との戦がこの周南の地方にまで波及していたともいえたのです。この時富田と下松の中間の野上庄(徳山)に家臣の野上氏を寄せて下松富田平野の展望のきく馬屋の城ヶ岡にとりでを構えたのです。南朝側の攻撃をむかえた下松の鷲頭貞弘は末武の内藤藤時と共に正平七年(一三五二)大内弘世等の軍と白坂山(白城山(しらじょう))において戦ったのです。末武城山の東方に長く延びた標高一六六mの山で花岡では白追山、下松の方では高坪山と呼んでいました。旗岡山の雑木林の尾塚が点々と残っていたと伝えられていましたが今は跡方も見当りません。大内氏の方が勝ったのですが、六三〇年も昔の事、この山野を駆け馳せた武者(つわもの)どもの跡には夏草が生い茂り、鳴く虫の音もこころなしか寂しく聞えてくるようです。

夏草やつわものどもの夢のあと

また寛延三年(一七五〇)の庄屋の報告によると「古い城が馬屋にあった。城主は誰だか申伝えない。」とあります。

山陽道を西久米の久米市から分れて山道に入り、野上庄の馬屋・大河内・鬼ヶ頭・舞車を経て中央の今宿に達する一路線がありました。この道はもと官道として存在し、馬屋は駅伝を掌る駅家(うまや)のあて字ではないだろうかとも考えられます。

またこの道は実際に山陽道花岡方面と野上庄(徳山)との交通上の要路であるとともに、一の井手を経て須々万・長穂方面にも連絡したので山間線としても重要な路であったのです。

歴史の道を捜しながら歩くことも忘れ得ない思い出の道となることでしょう。

温故組新

「故(ふる)い事を温(あたため)て新しきを組む」という意味でしょうが、老人クラブの方の故郷おこしの熱意が結集されて遠尾山への登山道が整備され山上に着いて眺める景色は絶好です。六百余年の昔の城跡には当時を物語るってくれるものは分らないけれど、山上からの展望のよききく点は抜群です。城の時代だっで見透しのきくことが第一要件だったし敵の動静を早く発見する

ことが先決だった時代でした。今でも気象衛星を高く打ちあげ、日々の気象観測に偉力を発揮していることもその発想において、皆同じ事でしょう。

子等と共に孫を引きつれ山に登って、わが家の位置を確認したり、草や木の名を教えたり、草の葉っぱを手で鳴らしたり、町の生活にのみ馴れている幼年時代に、角度をかえて観ること、歩く速度で眺めるなど初体験をした者は大きくなっても、どこに行っても、足でかせいだ故郷の体験は生涯心の映写幕に写し出すことができるでしょう。

それでは、この山上から見えるところの物語をいたしましう。

◆平原

遠尾山の麓村で昔平原何某(なにがし)と申す郷士の居城があり、峰に広い平地が残り、筒井などもあったと言伝えられています。

◆具足石

昔の報告書の中に「具足峠に具足石という石があった。」とあります。山道の雑木の茂っている木陰に50cm位の石があり、よく見れば鏡のような型をしている。具足石と呼ばれ、小さな鳥居がつくられ御幣(へい)が供えられています。

○具足石(夜泣き石)の伝説
昔、久米の里に大金持が住んでいた。何でもこれをやり

たいと思いつくとじっとがまがんでできないで、何でも手かけてみなければ気がすまない人だった。

ある日のこと、家の庭を築こうとして、「具足峠にはかっこうな大きな石がある。」と聞き、多くの入足に頼んで庭まで運ばせた。庭にすえるとあたりの風景とびつたりなので、金持はうれしさの余りその晩は夜も寝ないで杯を片手にして見とれていて、どこからともなく、陰にこもった声をする。耳をすまして聞いていると、大石のあたりの方からの声、ふと立ち上って近寄ってみると「具足へ帰ろう、具足へ帰ろう」とその大石が泣いているではないか。

さすの金持も、その物悲しい、胸にしみ入るような声を聞いては、急に気分が悪くなり翌朝夜の明けると否や峠の具足峠に返しに行った。それから具足峠の夜泣き石といわれ近寄るものもいなくなった。

◆早乙女塚

昔、久米から遠石に入る街道の側の水田で早乙女が田を植えていた。この地方に珍しい面白い風習が伝わっていたそれは「早苗打ち」といって田植のころになると、縁起をかついで道行く人に早苗を投げつけ、祝儀をもらっていたところがある年のこと、久米ヶ瀬の早乙女が、たまたま街道を通っていた飛脚めがけて早苗を投げつけた。すると、その飛脚は「早苗打ち」とい

うような風習があるとはつゆ知らなかったので「この無礼者め」とその早乙女を一刀のもとに斬り捨てて立去った。そこで里人達は「誠に気の毒なことをした」と早乙女の死後の菩提を弔うために「早乙女之碑」を立てその塚の側には松の木を植えたという。今は遠石八幡の東隣の千日寺境内の三十三観音や墓碑の間に独り寂しく早乙女の霊を慰めるかのように建てられている。

◆遠石八幡宮の 洪鐘の銘

遠石八幡宮の大鳥居をくぐって進むと、右手に鐘楼がある。この中の洪鐘(大鐘)の銘によると、元暦のむかし(約八百年前)源平両軍が遠石で戦った時流れ矢が飛んできて洪鐘を破損したが、元応二年(一一三二〇)これを再び鋳直したと記されている。この鐘は平家追討の軍を率いて西に下った源頼朝に対し、平家に味方していた末武保(花岡)の豪族内藤盛家(もりいさ)の軍勢が遠石において対抗した。翌年平家は壇之浦で滅亡した。

◆久米山慈福寺の 足利尊氏の宝篋印塔

高さ三一六cmの花崗岩製の宝篋印塔で形がよく均勢がとれていて堂々とした威容を備えている。この塔に使っている三孤偶飾(すみかさり)は最も発達したデザインで、鎌倉後期の名塔にみられる装飾である。三mを越す塔は数少なく

県下で最大で最古のものである。足利尊氏と深い関係にあったことが伝えられており、一般には逆修墓として知られているが、その確証はなく、尊氏の追善供養のための分骨墓と考えられる。

◆太華山と 与謝野鉄幹の碑

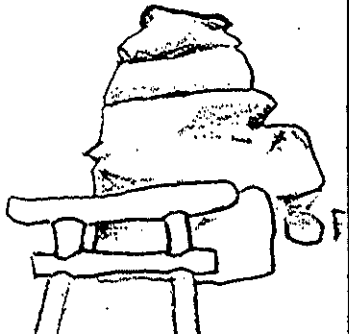
徳志寺の赤松照憧は私立白蓮女学校(徳山女学校)を開校した方でその弟の与謝野鉄幹は十七才の時教師として徳山に赴任し「徳山物語」を書いている。

この碑は最初昭和三十八年佐藤春夫氏を招いて蛇島に建てたものを昭和四十四年太華山上に移転したものである。鉄幹は徳山に度々来ており徳山鉄板の社歌作詞のため来徳したときの歌

「彼のあたり二十(はたち)の前の我を知る
蛇島、仙島、黒髪島」
を佐藤氏が書いたもの。

遠尾山上から海上に浮かぶ三島を眺めれば、遠い昔の歴史を語ってくれる様でもあり又、歌人によれば蛇島は魔性を仙島は神秘性を黒髪島は女性の黒髪をほうふつさせるとも言われている。

夜泣き石の スケッチ



写真中○印



特集記事の注釈

※【とおの山】文字使いについては、昔の報告書(地下上申「1740年」や風土注進案「1840年」)には、【とふの尾山】【遠尾山】【遠野尾山】などの文字が見られる。一方、市の山の台帳には【藤尾山】の文字が使っていますが、この特集では清木先生原稿に従った文字使いにしています。
※【城ヶ岡】は、現在は【城ヶ丘】ですが、前述の地下上申の中で「徳山村石高由来境目書」の所に「城ヶ岡と申す山有之候、、、」とあります。

7月31日は山口県知事選挙の投票日です。棄権は恥です。誘いあって投票にいきましょう。

桜木地区は投票率が大変低い地域のようなので、大事な一票です。どうぞ強い自覚をもって投票にいきましょう。(当地区白ばら会からも別途広報されます。)